



医学部だより

第9号

2005.8.1

特集 「阿波踊りと医学部」

阿波踊りの季節がやってきた。お囃子の音が聞こえる度に思い出す。わが42年卒業生は恩師足立春雄教授(初めて大学外からの赴任?)の産科婦人科学の初めての講義を受けた。学生運動(改革?)のあおりを受け、相談のため社宅を訪ねたことも、院生時代(彼は当時医学部長)には苦言も述べた。それでも若僧の私に、「自分ではどうにもならない。それは勘弁してくれ。頼むからワシの言うように」と。いくら正論でも譲歩せざるを得ない。そんな事があった後、毎年阿波踊りの時期が来ると、「太田君阿波踊りに来るのだろう」と電話がきて、医学部連で共に踊る阿呆となった。彼は「眉山の麓まで土地を買い取る」



というばかげた(当時では?)話を真顔でしたらしい。今から見れば、正しかったのでは?

ロンドンへ留学中に彼から筆書きの手紙が寄せられた。2年後に帰国すると、何とこの世にいないではないか?。大阪訛りの「狸親父」と異名があったようだが、私には父のようだった。活性化、活性化の下に「医学部連」もなくなり、入る連がない。原因は何だろう。読者は阿波踊りとノーベル賞のどちらを選ぶ? 自分は「前者で満足と」決め込み、歳と健康上の理由もあり、2年前から「見る阿呆」になった。今年もそうしよう。

(広報委員 太田 房雄)

たけのこ連

“たけのこ連の紹介”

医学科3年 小 泉 貴 嗣

■ 構成人数：100人程度

たけのこ連は、徳島大学医学部医学科の学生連です。この連の名前は、成長して「やぶ」医者になる前の「たけのこ」の集まりであると言う、皮肉めいた意味を込めて名付けられました。毎年、各教室の先生方をはじめ多くの先輩方の御支援と御協力のもと、阿波踊りに参加させていただいております。

構成人数は百人程度と、学生連にしてはかなりの大所帯です。演舞場では、一生懸命に練習した鳴り物と「たけのこ、たけのこ、馬鹿にすな。末は博士か、やぶ医者か」と言う囃子に乗って皆それぞれが自由奔放な踊りで観衆を大いに沸かせます。そして、踊りの合間の休憩時には先輩後輩の分け隔てなく楽しく酒を飲み交わして英気を養い、また次の演舞場で乱舞するので

このようにして、私達は阿波踊りの開催される四日間を熱く過ごします。決して上手な踊りではないかも知れませんが、皆

一生懸命に踊っておりますので、どうか温かく見守って頂きたいと思います。



栄養学科連

“阿波踊りに向けて”

栄養学科3年 河野尚平

大学に入学して最初の夏に初めて阿波踊りに参加してから今年で3回目になります。県外出身の私にとって1年目、2年目と新しい体験が多くありました。

例年、私の所属する栄養学連では1年から3年までの男子学生が鳴り物を担当し、また当日までの準備や踊りの順番を決めるための抽選や場所とりなどの裏方全般を担います。各学年とも男子学生は5人前後しかいなかったの、一人一人の役割が多くとても忙しかったのですが、少ない人数であるからこそ先輩と後輩と一緒に協力し合えたと思います。私の場合はどちらかと言えば助けてもらうことのほうが多く、羽目ははずし過ぎて迷惑をかけることも多々ありました。

そんな私ですが今年は連長をすることになりました。今年は参加予定人数が100人以上と例年にない大人数となり、そうなので、連をまとめきれぬかどうか少し不安はありますが、



1年生から院生、さらには先生方まで参加者全員で最終日の交通規制が解除されるまで乱舞したいと思います。

美連

“美連の紹介”

保健学科4年 池口雅紹

保健学科の連「美連 (Miren)」は看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻の学生から構成され、参加人数は百人以上と多く、みんな仲良く踊りに参加しています。美連には、鳴り物(楽器)が大太鼓、小太鼓、鐘の3つあり、全員で声を掛け合いながら楽しく踊ります。初心者の方も1週間ほどの練習で踊れるようになり、気軽に楽しむことができます。踊りが終わった後には打ち上げ



もあり、踊りを通して仲良くなった仲間・先輩達と盛り上がります。保健学科の学生で、阿波踊りを極めたい人、友達を増やしたい人、とにかく楽しみたい人は、美連と一緒に踊りましょう。



● 阿波踊り職員連一覧 ●

分野名	連の名前	人数	教室員以外の参加の可否	活動内容
泌尿器科学 088-633-7159	珍宝連	30~50人程度	可	1日のみ参加。今年は12日(金)
脳神経外科学 088-633-7149	舞松原連	50~80名	可	毎年8月13日に関連病院や県外からの人たちを迎え、にわか阿波踊りチームを作り上げ、街に繰り出しています。
侵襲病態制御医学 088-633-9191	ますい連 山田(手術部)	45名程度	可	今年は8月13日(土)に阿波藍連さんの鳴り物にご協力いただき、3~4箇所の演舞場を回ります。
視覚病態学 088-633-7163	黒瞳連 林	約30名	可	阿波踊り期間中、1日参加する。
耳鼻咽喉科学 088-633-7168	みみはな連	同門会員、会友およびその家族、友人、知人	可	昭和39年に結成以来、毎年揃いの「みみはな連」の浴衣で阿波踊りに参加している。40年以上の歴史があり、徳大医学部では最も古い連の1つ。
臓器病態外科学 088-633-7139	たけやぶ連 吉川、池本	50名	可	阿波踊り期間中、1日参加予定。
病態制御外科学 088-633-7143	にげか連 梅本	30~50人 +うきぎ連	可	4日間のうちくり出すのは1日のみである。当日は教室員総出で準備し、棧敷で1、2箇所踊っている。ただし棧敷で踊れるのは年々少なくなっている。
運動機能外科学 088-633-7239	かがし連 東野	50名程度	可	昨年は、阿波踊り期間中に骨延長学会を主催したため、出席者を含めて230名の大かがし連になった。徳島大学で手術を行った患者(主としてこども)も多数かがし連で踊った。
生体情報内科学 088-633-7120	いちない連 安倍	30~40名+扇連	可	教室員、同門会OB、関連施設等の職員・家族が参加し、扇連のバックアップにて踊っている。
臓器病態治療医学 088-633-7124	2内科連 友兼	約60名	可	毎年楽しく踊っています。今年は13日に踊り練習をしてから、17時に病院玄関前をバスで出発予定です。
分子制御内科学 088-633-7127	三徳連	50名程度	可	毎年12日に参加している。
精神医学連 088-633-7130	あたま連 伊賀	40名程度	可	1日のみ参加。今年は15日(月)
女性医学 088-633-7177	ぎねこ連	約40名	可	例年2日目に連を出しています。保健学科助産学専攻、医学科で産科婦人科に関心のある学生も参加しています。
病態放射線医学 088-633-7173	すかし連 岩本	50名程度	可	1日のみ参加。今年は12日(金)
形成外科学、皮膚科学 088-633-7296	眉遙会	30~40名	可	皮膚科と形成外科の合同の連で踊り期間中1日のみ参加(土曜阿波踊り期間中に徳島形成外科集談会を開催している。)

*参加を希望される方は、事前に各分野等阿波踊り担当者に直接、お問い合わせください。

珍 宝 連

“珍宝連は今年も行く”

泌尿器科学 金山 博 臣

泌尿器科は毎年阿波踊り期間中に1日乱舞に繰り出しています。診療があるので1日のみですが、教室員や家族をはじめ友人知人、病棟や外来の看護師さんなど、さらには関連病院の先生や看護師さんも参加します。他大学の先生や海外からのお客さんも参加し、国際色豊かな連になります。昨年は初日の12日に参加し(写真)、今年も初日の12日(金)に繰り出す予定です。参加したい人には浴衣などを貸し出していますので、希望者は是非申し出て下さい。



ます。女性には恥ずかしい連名かもしれませんが、泌尿器科を最もよくあらわす名であり、今のところ変更する予定はありません。一時は、提灯の先に木製の御神体をくくりつけていた時もありましたが、さすがに現在はつけていません。

参加者は阿波踊りがはじめての人も多く、踊りが上手な人も下手な人も関係なく楽しんでます。“珍宝連”に参加したい人、恥ずかしがらずに一緒に盛り上がりましょう。

ところで、泌尿器科は開講当時より変わらず“珍宝連”を名乗ってい

舞 連

“舞連ダンシングチーム自己紹介”

脳神経外科学 松 原 俊 二

我々は、特に練習をせず、ぶつつけ本番を基本姿勢としていますので、気軽に参加できます。フォーメーションなどなく、“手を上げて、足を運べば阿波踊り”のキャッチコピーどおり、我々の踊りは、基本的には手足を速いテンポにあわせて、はこんでいるだけです。しかし、元気さと笑顔ではどの連にも負けません。鳴りものは宝連(たかられん)が、力強い太鼓と正確な鉦

のリズムで連を盛り上げてくれています。浴衣は白地に波の模様が入っていますが、この波は実は脳波を表しており、研修医が踊りながらでも勉強できるようになっています(?)。名前は舞う連と書いて(舞連(ぶれん))ですが、これは蝶のように舞う意味と脳(brain)の意味とをかけています。さあ、今年もいきますか! やっとさーっ、やっとさーっ!!

ま す い 連

“寝ている阿呆は一人もない”

侵襲病態制御医学 山 田 博 英

昨今、阿波踊りの連を解散している教室も見受けられますが、麻酔科は例年通り踊ります。今年は8月13日(土)の一晚に、医局員全員「踊る阿呆」となって、無料演舞場を中心に踊り明かします。夕方には医局に集合し、まずは軽食を取りながら、軽く踊りの練習を。その後、バスにて両国～藍場浜へ繰り出します。

毎年、手術部や関連病院の看護師も参加されています。また連を持たない科の医師や研修医も同じ浴衣を身に纏い、ますい連はいつも大勢で賑やかに楽しく踊っています。昨年はくじ運もよく、藍場浜の有料演舞場で踊らせていただくことができました。さて今年はどうなりますか?

なお、踊り浴衣(男性用・女性用)、法被(子供用)、団扇はすべて揃っておりますので何も持たずにお越し下されば結構です。参加を希望される方は、手術部医

局(088-633-9191)もしくは麻酔科・山田までご連絡下さい。みなさまの参加をお待ちしております。



黒 瞳 連

“黒瞳連の紹介”

視覚病態学 林 勇 樹

私たち視覚病態学分野(旧眼科学教室)では、黒瞳連として阿波踊りに参加しています。医局員の他に、関連病院や開業医の先生とその家族の方も参加し、和気あいあいとした雰囲気になっています。年によっては、はるばる県外の眼科病院からも黒瞳連に参加しに来ることもあります。また、本番に先立って、若い医局員は有名連の練習に一日参加して、踊りの基本姿勢から指先の動きまで指導を受けた上で、当日に臨んでいます。当

日は黒瞳連の提灯を先頭に、黒い瞳のロゴ入りの浴衣をまとい、眼科診療と手術で養われたリズム感を生かして、楽しく優雅に踊ります。私たち黒瞳連の特色として、人数はそれほど多くはありませんが、その分互いに仲が良く気心がしれています。また、女医さんが多いので華やかさがあって、若さあふれる連といえます。今後も黒瞳連の活動を続けていく予定ですので、よろしく願います。

みみはな連

“みみはな連の紹介”

耳鼻咽喉科学 武田 憲昭

徳島大学耳鼻咽喉科学教室には、40年以上の歴史のある「みみはな連」があります。「みみはな（耳鼻）連」は、昭和39年5月に徳島市で開催された第65回日本耳鼻咽喉科学会総会の懇親会で阿波踊りを披露する目的で結成され、それ以来、毎年阿波踊りに参加しています。昨年、耳鼻咽喉科学教室は開講60周年を迎えましたが、その記録によれば徳大医学部で最も古い連であり、お医者さんの連という珍しさもあって当時は評判の連であったとのことでした。

「みみはな連」と染め抜いたそろいの浴衣は、初代白川吾一郎先教授の秘書であった山中夫佐子さんのデザインで、現在の浴衣は3代目です。連長は歴代の同門会会長であり、現在は岡田修治先生が務めておられます。「みみはな連」は同門会と教室が一体となって協力し運営



されていますので、毎年、同門会員だけでなくその家族、知人などが数多く参加する、活気と歴史のある連です。

たけやぶ連

“たけやぶ連の紹介”

臓器病態外科学 吉川 幸造・池本 哲也

臓器病態外科学教室は、医学科学生連のたけのこ連が成長し「大きくなったらやぶになる(?)」たけやぶ連と言う名前で阿波踊りに毎年参加しています。

他の阿波っ子の例にもれず、根っからの阿波踊り好きの集まりです。

参加中は教授を筆頭に医局員全員が参加し、美味しいビールを飲みながら熱い阿波の夏を皆で楽しんでいます。

昨年から新しく着任された島田教授を連長に迎え、以前にも増して楽しい阿波踊りになっています。

今年は2日間の参加を予定しており、同門の先生方をはじめ、諸先生方、学生さんなど、どなたでも気軽に参加して頂けたらと考えております。

私たちと一緒に踊る阿呆になりましょう。

にげか連

“にげか連の紹介”

病態制御外科学 梅本 淳

「にげか連」は先々代教授である井上権治先生の時代に結成され、その歴史は30年以上になります。当時井上先生と関連が深かった鳥取大学第1外科と夏は徳島で阿波踊り、冬は大山でスキーと交流してきました。先代教授の門田康正先生の時代には踊りの時期に県外からの来客とともに栈敷にくり出し、学会主催の折にもレセプションで有名連とともに臨時「にげか連」を結成し好評を博してきました。本年は現教授の丹黒 章先生が赴任後初めて連長を務め、九州、山口からの来賓と一緒に、

「にげか連」で「踊るあほう」になる予定です。当教室は外科の教室であることから日常業務が忙しく、踊りの練習はほとんどすることが出来ません。しかし、徳島で生まれ育った人はもちろん徳島に来て間もない人も踊りのシーズンを迎えると自然と踊りの輪の中に入り、しっかりと踊れるのが不思議です。今年は8月13日(土)に予定しています。「にげか連」で踊ってみたい方は、当教室までご連絡ください。皆様のご参加を教室員一同お待ちしております。(文責：三好孝典)

かがし連

“医者も患者も踊らにゃそんそん”

運動機能外科学 東野 恒作

各教室にもそれぞれ連があります。整形外科でも30人～40人で編成される「かがし連」があり、毎年踊りに繰り出しています。平成16年度はいつもの「かがし連」ではなく300人を超える巨大連となりました。その理由は大学病院で治療した患者さんと一緒に踊ったこと、もう1つは全国から先生をお招きしたことによります。

患者さんと一緒に踊ることになった経緯は、全国から徳島大学を紹介され治療していた患者さんが「元気になったら阿波踊りを踊りたい」という希望を安井教授が聞き「そんならみんな呼ぼうや」と提案されたことからでした。

昨年はお盆に徳島で「第17回日本創外固定学会」を主幹開催したため、外国人講師や全国の著名な先生方がそれぞれのご家族の方を連れて参加されました。



いにしへの阿波踊りは老若男女、みんな踊り明かしたと聞きます。平成16年度のかがし連も国籍如何を問わず、医者も患者さんも一体となり踊りを楽しめたと思います。今後もかがし連をよろしく願います。

学部長報告

モンゴルにパワーを感じて



医学部長 曾根 三郎

今年度からは、医学系分野での国際交流も積極的に推進したいとの想いをもち、海外での経験が豊富な方に担当をお願いしたいと探していたところ適任者がおられ、村澤国際担当学部長補佐が誕生した。

戦後の長い間、多くの日本人が米国へ留学し、最先端の医学・医療の情報や最新の技術を持ち帰り日本の発展に大きく貢献したことは言うまでもない。今、日本に問われているのは、アジアや発展途上国からの優秀な人材に教育・研究の機会をいかに与えることだと言える。現在、医学部は外国の大学と交流協定を結び、学術並びに研究者の交流を推進している。事実、医学系大学院生や留学生が多数、研究に専念されている。これからも提携大学間でいかに有意義な交流を蓄積し発展させていくかが大きな課題と思われる。

この6月初旬、Health Science University of Mongolia (HSUM) と本学医学部との学術交流協定書に調印するために玉置、丹黒、安友の3教授と村澤国際担当補佐と共にウランバートルを訪問し、第一回モンゴルー日本合同シンポジウムに出席し学術交流が盛大に行われた。6月7日には交流協定書に調印した。この模様は現地のテレビ局2社で放映された。今後の徳島大学との学術交流に大きな期待が寄せられているのが感じられた。

両大学の交流は、HSUM 出身の Byra Yanjima さんが本学で博士号を取得したのをきっかけに深まった。今回の訪問は、HSUM の学長、学部長により推薦された留学生との interview を現地に

て行った点が大きなポイントであった。今年度中には4名のモンゴル留学生が本学で研究に専念する予定である。HSUM の Lk Havgusren 学長との話の中で、「10年前に41歳で学長に推薦され、当時はいかに外部資金を集めるかを大きな目標としていたが、途中でその考えは間違いであったこと。最も重要な事はいかに man power を育てるかであったかを学び、優秀な人材をどんどん欧米や日本に留学させるようにした」という説明が印象的であり、同感の想いをした。事実、日本の大学で博士号を取得したドクターが HSUM の医学部長、歯学部長として大活躍していた。また、医学教育のためのテキストブックもロシア語から英語への切り替えを急いでいる。まさに、1990年以後、ソビエト崩壊を受けてモンゴルは独立独歩の道を歩んでいる。モンゴル政府が重点的に取り上げている克服すべき三大疾患として、糖尿病、高血圧、がんがあげられており、共同研究も含めての協力が要請された。

モンゴルの医学・医療のレベルはお世辞にも良いとは言えないが、厳しい自然と共生するモンゴル大地で育った横綱力士、朝青龍に代表されるように、ハングリー精神とガッツのあるモンゴル留学生の今後の活躍に期待したい。今回の交流協定で、来年度には両大学の医学生同士がウランバートルで交流することで合意した。モンゴルの医学生と大草原のゲルで一緒に過ごし、大いに友好を深めて欲しいと念願している。参加者を求む!!!

就任挨拶



医学部長補佐（教育関係担当）山野 修司

平成17年5月1日付けで医学部長補佐（教育関係担当）に就任させて頂き、大変名誉に思いますとともに、責務の重さを感じております。国立大学法人への移行を契機に徳島大学でもここ数年教育システムの

大きな改革がありましたが、学部長がいわれている「学生のためにどうあるべきか」を基本理念とし、医学部全体の教育環境の改善に取り組みたいと思います。ただ私自身医学科や栄養学科の教育事情を必ずしも十分に熟知しているとは言えませんの

で、医学部長をはじめとし多くの先生方と密に連絡を取り、またご指導をいただきながらやっていきたいと思います。また、このような時期に私をあえて医学部長補佐（教育担当）に指名していただいたのは、現在保健学科が修士課程や博士課程設置の正念場にあり、設置のための環境作りをしっかりとせよとの叱咤激励と理解しております。将来保健学科が蔵本キャンパスの中で研究部の一員として、新たな提案や価値の創出ができるようにがんばりたいと思います。

医学部長補佐（国際関係担当）村澤 普恵



今年4月から、国際関係担当医学部学部長補佐として仕事をさせていただいています。6月初めにはモンゴル健康科学大学との学術交流協定締結のため、モンゴルに同行させていただきました。これまでも県内在住外国人のサポート、異文化理解、国際交流・協力関係の仕事に携わってきま

したが、学術交流に携わるのは初めてのことです。慣れないこともあり関係者の皆様にご迷惑をおかけしながらの日々で

すが、国際関係に関することでこのような新しい職務に出会えたことは私にとりまして大変幸せであり、名誉なことと感謝しています。

私は、大学院生活とその後の仕事の関係で10年近くを米国で過ごす機会がありました。その間、多くの方に助けていただきました。今後は、外国でお世話になったそのご恩返し気持ちも込めて、大変微力ではありますが、職務を通して学術交流、国際交流のお役に立てることができればと願っています。どうぞよろしくお願い致します。

医療が変わる、医療を変える－医療情報学の提案

医療情報部 森口博基

医療は社会と相互に影響を及ぼしながら、ダイナミックにその形態を変え進化します。科学、倫理的基盤の上で成り立っていると同時に、社会、経済学的側面も重要になっています。医師は専門知識を持って診療や研究に当たっているわけですが、近年、社会が医療に要求するレベルと質が変化しています。個人による最大限の努力と技量や知識で対応し、社会的地位と名声を築いてきた医師が、「当然、守られるべき」と考えてきた立場が、だんだん「当然」のものではなくなってきました。医療における経験的な問題解決方法が、陳腐化してきているのです。

病院は今、診療レベルや地域との連携が重要視され、患者サービスなども十分提供できることが社会的に求められています。個人の技量や経験に任されていた医療は、多職種間でのチーム医療に移行しています。情報をみんなで共有することによって、医療の質が平均化し、向上します。情報を共有化すれば、だれも「勝手なこと」はできず、良い状態に向かう力がはたらくからです。医療情報部は、平成12年に文部科学省から正式認可を受けた新しい病院臨床部ですが、その基礎となる医療情報学は、ITを使って医療をシステム化し、便利で安全な医療サービスを考え、提供する新しい分野です。実際、情報技術(IT)を使ってさまざまなツールや枠組みを提供することで、安全で効率的な医療が行われるようになりました。

重要視されている病院経営についても、個人のノウハウで行うのではなく、現代的な組織管理や経営分析の方法、経営指標の達成方法を知れば、効果的、効率的に行うことができます。日常的活動として、職員のみなさんの意見を取り入れた病院情報システムの改良や、個人情報の保護、リスクマネジメント対策などの基盤づくりも行っています。さらに、いろいろなシステムから集められた情報がいつでも任意に引き出せるデータウェアハウスという仕組みを運用し、経営分析に役立てています。

教育的面では、PBL教育のための「Tutorial Hybrid System」や、新しい教育の方法－Web Based Learning (WBL)－いわゆるインターネットを使ったe-Learningのシステムも開発・供用済みで、学生のみなさんも経験された方があるでしょう。e-Learningは、現在、いろいろな分野で広く使われていますが、大学間で授業内容(コンテンツ)を共有化し、自大学以外のコンテンツに対して、単位を認めているところもあります。アメリカではインターネット上で優れた医学コンテンツを購入することができます。今後、良いコンテンツが提供できることが、大学の能力として問われることになるでしょう。コンテンツの制作プロセスは「経験と知恵の資産化」であり、「無形の知的資産を著作物として有形化する」ことなのです。さらに、今注目のマネジメントや経営に関する教育も徐々に取り入れています。

研究・開発中のプロジェクトとして、

- ・携帯を使った画像伝送システムの開発と応用
 - ・EBMに基づいた栄養指導プログラムの開発
 - ・3DCGによる医療コンテンツの開発
 - ・データウェアハウスによるデータマイニング(データの探索的分析)の研究
 - ・基礎や臨床のさまざまなプロジェクトの基盤となるデータベースづくり
- などがあります。

このように、医療情報部は医療情報学という、いろいろな分野が混成・融合してできた、新分野を開拓しています。その開発環境はみなさんの期待に十分応えられるものです。それが可能なのは、「アイデアと知識と経験の資産化」という手法によって、産学連携が大変多いからです。われわれはITを基盤とした枠組みが社会を変え、医療を変えると確信しています。今までにない研究・開発環境で新分野を目指す・あなたもいかがですか？

まちの保健室 ▶
(医療相談窓口HP)

電子カルテ・
オーダーリングシステム ▼



▼インターネットによる教育システム



◀褥瘡診断・治療支援システム

国際交流

モンゴル健康科学大学との学術交流協定調印を終えて

医学部長補佐 村澤 普恵

国土面積は日本の4倍、そこに約250万人の人々が暮らす、蒼洋の国、モンゴル。その名の通り、蒼い大地が、大きくゆったりと波打つようにどこまでも続くその景色は、訪れる人々の心を大きく包み込んでくれるようでした。

6月4日から9日までの日程で、曾根医学部長、玉置教授、丹黒教授、安友教授に同行させていただき、モンゴルの首都ウランバートルにあるモンゴル健康科学大学を訪問しました。このたびの訪問の目的は、日本とモンゴルの合同学術シンポジウムを開催することにより、医学と医療に関する情報交換をすること、徳島大学医学部とモンゴル健康科学大学との学術交流を推進するための協定を結ぶことでした。



合同シンポジウムは、モンゴル健康科学大学のカンファレンス・ルームで6日に行われ、午前と午後のセッションで、合わせて11人による研究発表が行われました。そしてそれぞれの発表に対して活発な質疑応答が行われ、医学・医療に関する情報交換を終了しました。

翌日、モンゴル健康科学大学で学術交流協定の調印式が行われ、曾根医学部長とルハグワスレン・チェレンフー学長が協定書に署名しました。若手医師を徳島大学大学院に受け入れるほか、共同研究やシンポジウムの実施、研究データなど学術情報の交換を進めることに合意しました。

モンゴル健康科学大学は1942年に国立大学として創設され、現在、医学科、伝統医学科、歯学科など医療系7学科があります。2002年に徳島大学大学院、栄養学研究科に、モンゴル健康科学大学の卒業生が入学したのをきっかけに教員間での交流をしていました。

このたびの訪問で、私も貴重な時間をいただき、両大学出席者の皆さんの前で、徳島県と徳島大学医学部の紹介をさせて頂く機会を得ました。これまでに経験をしたことのないような緊張感でしたが、何とか紹介を終えることができましたのも、学部長をはじめ3人の先生方のご理解のおかげであると心より感謝致しております。

今後、両大学間での学術交流、国際交流が進められて行きますが、私もその交流の一助となるよう努力をして行きたいと思っております。

国際交流

「実践医学実習」における学部学生の海外留学

人体病理学分野 佐野 壽 昭

人体病理学分野では、平成10年以来この7月までにほぼ毎年1-3名、計13名の学生を、トロント大学医学部教育病院の一つであるセント・マイケル病院病理部に短期留学(2ヶ月前後)させてきた。このうち多くは3、4年次の研究室配属期間中の留学だが、5名は6年次の実践医学実習期間に留学している。同様の海外留学は塩田洋教授、福井清教授の教室も行っている。

実践医学の趣旨は将来の進路決定の前に大学内外の施設、部門に接触する機会を与え、自分の適性を知るとともに選択肢を広げることにある。海外留学する学生が卒業すぐに海外で活動する訳ではないが、将来国際的な分野へ進出する動機付けとなること、日本の医学・医療との相違点(日本の良さも含めて)や英会話力の大切さを肌で知ることなどが期待されることから、学生の希望に応じてトロント大学カルマン・コバックス教授に受け入れを依頼してきた。学生達がどれほど充実した経験をしてきたかは青藍会報に体験談が載っているので参照して頂きたい。今後この留学の機会を継続したいと願っているが、コバックス教授が高齢であり微妙である。本来、実践医学の派遣機関との間には公式の取り決めを交わすことを原則とし、臨床教授

の名称を授与するなどしているが、海外留学は相手先教授と個人的交流だけが基盤である点が問題と感じられる。せっかく続けていることであり、徳島大学の学部学生教育における国際交流の面での意義は大きいと思われるので、個人の域を超えた基盤作りを進める必要がある。



国際交流

フロリダアトランティック大学への保健学科学生の海外研修

保健学科看護学専攻 近藤 裕子

保健学科看護学専攻では、3月13日～20日の一週間、フロリダアトランティック大学 (FAU) 看護学部に2名の看護学生と3名の教員で研修に出かけました。研修の目的は、FAUにおける看護教育の実際を視察、見学することにより、これからの看護の学習に役立てることです。この研修は昨年に続いて2回目の訪問です。今回はフロリダアトランティック大学における教育課程や、ヘルスアセスメントの授業への参加、JFK Medical Center や Delray Full Service Center の施設見学など、盛りだくさんの研修内容をこなしました。当たり前のことですが、成田から搭乗した航空機から英語中心となり、毎日の英語シャワーに耳をふさぎたくなりながらも、必死で会話の意味を理解しようとつとめ、心身共に疲れを覚える日々でしたが、充実した研修でもありました。

フロリダアトランティック大学では教育の基盤をなす理論として Caring 理論を活用しています。看護学部の理念や目標にも Caring の文字がみられましたし、講義を受けた先生方の全身から Caring の意味が読みとれるような態度がみられ、理論に基づく教育・実践が行われていると実感しました。本学でも理論に基づいたカリキュラム構築の検討が必要ですし、それには教員自身からまず活用する理論について十分に理解していることが必要です。

JFK Medical Center では、最新の器機を使用した治療やケアの



場を視察し、救急病棟ではテレビのER(Emergency Room)の世界とそっくりと、一般人に戻った感想をもちました。ハイチから越境した人々が生活する地域の Delray Full Service Center では、幼児から成人までが教育を受けている現状や、診察室で NP(Nurse Practitioner) の活動などを見学し、JFK Medical Center との違いにアメリカの明暗をみた思いでした。

非常に短い研修でしたが、アメリカの看護教育や看護の現状をかいまみ、日本における医療や看護について考える一助となりました。

国際交流

「国際交流の夕べ」を開催して

医学部長補佐 村澤 普恵

6月24日(金)、医学部では初めて、留学生を対象とした交流会「国際交流の夕べ」を開催。留学生と先生方合わせて74名もの皆さんが出席してくださいました。交流会の前半では、留学生が、それぞれの出身国と大学の紹介をし、後半は、場所

をエルポに移してのパーティとなりました。

準備をする際、食事、飲み物をどの程度用意しようかと随分考えました。特に飲み物は、夏なのでビールや冷酒を多めに用意したのですが、留学生に人気があったのはコーラでした。次回、交流会を開催する際には、コーラ類をたくさん用意すべきだと反省。

また、プレゼントについても随分悩みました。何か日本の思い出になるものと思い、扇子、万華鏡、和紙製のランチョンマットとコースターのセットなどに加え、ご家族で楽しめるようにと、ケン玉、お手玉、竹とんぼなども揃えました。歌ありゲームありのパーティは午後8時過ぎに終了。

曾根医学部長、実行委員長の安友教授にご指示を頂き、学務の芳崎課長、松田専門職員、加藤さんにも大変お世話になりました。この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。また、留学生の皆さん、先生方、ご出席いただきまして誠にありがとうございました。



数字で見る医学部

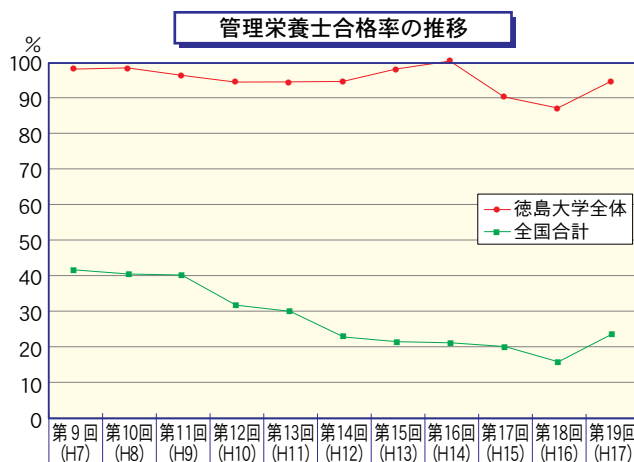
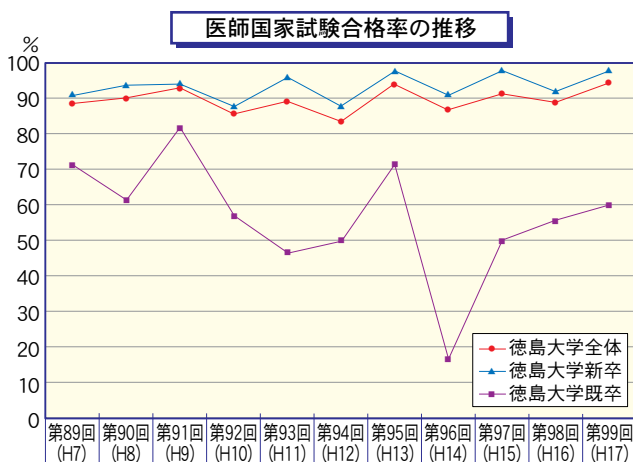
◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成17年度入学試験実施状況結果については、別表のようになりました。

平成17年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医学科	95	786	458	97	95	65	30	25	68	2	35	29	31
栄養学科	50	226	120	55	52	9	43	19	33		35	12	5
保健学科	看護	70	364	287	90	79	9	31	48		63	13	3
	放射	37	186	124	41	40	29	7	33		31	6	3
	検査	17	124	88	25	19	9	4	15		8	9	2

◆ 国家試験（医師・管理栄養士）



文部科学省科学研究費採択状況について

医学部長補佐（研究担当） 寺尾 純二



今年の文部科学省科学研究費（科研費）の採択状況がほぼ明らかになった。本研究費は大学の研究を支える競争的資金のうちでも最も大規模なものであり、その採択件数や採択金額は大学間の総合的な研究力を比較するバロメータとされることが多い。

本学医学部・付属病院の合計について3年間の科研費採択状況をみると（表参照）、今年は昨年並みの件数と金額を獲得したと思われる。特筆すべきはこの3年間の若手研究(B)獲得が順調に伸びていることであり、この年代の研究者の研究活動がみとめられたこととして素直に喜ぶたい。さらに若手研究(A)や基盤研究Aの採択が増えることを期待したいと思う。

平成17年度科学研究費補助金採択状況（医学部・付属病院（病・管理）の合計）

(平成17年6月17日現在)

研究種目名	平成15年度		平成16年度		平成17年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究(2)	7	78,900	9	83,500	11	60,800
基盤研究A(2)	0	0	0	0	1	18,590
基盤研究B(2)	20	96,500	21	102,350	18	96,100
基盤研究C(2)	59	92,600	68	100,800	59	89,500
萌芽研究	8	10,700	10	16,800	10	17,900
若手研究(A)	1	8,700	1	7,400	1	8,710
若手研究(B)	32	49,300	38	58,900	55	89,900
特別研究員奨励費	4	2,922	3	3,000	0	0
合計	131	339,622	150	372,600	155	381,500

医師国家試験合格体験記

僕は国家試験に落ちた。そうなることは予想していた。卒業試験は再試、再再試と国家試験の1ヶ月前まで落ち続けた。卒業試験に精一杯で国家試験対策などできなかった。1度目の国家試験はたった1ヶ月の勉強だった。そして案の定落ちた。

5月、国家試験に落ちた4-5人が集まり勉強会をすることになった。失意のどん底だった。まずは挫けた心身に英気を養う必要があった。「残念会」、2ヶ月続いた。

7月、ようやく残念会が終わった。挫けた心身は健全に回復し勉強会にはかどった。凄く速さで「アプローチ」がさばけた。一日に一冊「アプローチ」が終わることもあった。

一日中勉強していると少しずつ病んでくる。何のために勉強するのかわからなくなる。そこで規則正しい生活と社会勉強をかねて僕はアルバイトをすることにした。医学生時代のアルバイトといえば家庭教師や塾の講師というのが一般的だ。しかしせっかく国家試験に落ちたのだから何か新しいことをしてみたい。僕は酒の量販店で働いた。時給800円くらいだった。20kgの荷物を棚の上に上げたり、冷凍食品をマイナス24度の倉庫から出したり、「いらっしゃいませ。ありがとうございます。」大きな声で叫んだ。当然のことだがしんどかった。

勉強とアルバイトの両立はきつかった。息抜きが必要だった。

「今年は頑張ろうの会」を開いた。「頑張ろうの会」、秋まで続いた。

9月、国家試験の問題集は3通りくらい終わっていた。アルバイトは結局塾の講師に変わった。経済的な理由と勉強のために酒屋のアルバイトはやめた。少し不甲斐なかった。その分勉強に費やす時間が増えた。やはり病まないように息抜きが必要だった。「社行会」、試験直前まで続いた。

3月、国家試験を迎えた。試験の手ごたえは前年と変わらなかった。この2日間のためだけに1年間頑張った。あつけなく2日間が過ぎた。その晩1年を通じての「打ち上げ」を行った。「打ち上げ」は朝まで続いた。

4月、結果発表。国家試験に落ちた2人で高松まで見に行った。名前があった。

一寸の光陰軽んずべからず。1年長いようで短かった。国試浪人という身分は辛かったが、楽しい1年だった。医者になるためだけではなく、自分にとっていいことがたくさんあった。目標は国家試験に合格することだったが、その目標を超える何かを経験できたのではないだろうか。

みなさん、国家試験に落ちることを勧めるわけではありません。でも落ちてそんなに悪くはない。それなりにいい経験ができますよ。

学友会は支援組織です

学友会 総務部長 安友康二

学友会は学生および教員からの会費をはじめとして、多くの寄付から成り立っている組織です。この場をお借りしまして、皆様方に感謝申し上げます。

少数派だと思いますが「学友会って何?」という方にまず学友会を紹介したいと思います。学友会の目的は会則によると「本会は、会員の知徳を磨き、心身を練り、親和に努め、学風の発展をはかることを目的とする」と書かれてあります。要はよく学び、よく遊びなさい、それを支援しますよということだと解釈できるのではないのでしょうか。具体的にはクラブの活動費、整備費などが主な支援です。

体を鍛えること、精神を清らかにすること、団体でハーモニー

を奏でること、技術を磨くこと、社会活動を行うこと、そのような様々なことが、徳島大学蔵本地区にある多くのクラブ活動や蔵本祭で可能です。クラブ活動をするだけでなくが大事なことはありませんが、学生時代のクラブ活動でしか経験できない事があるでしょうし、その年代でしか感知できないことがあることも間違いありません。クラブ活動を通じて多くの友人にも巡り会えるはずで、蔵本祭も年に一度のイベントとして思い出に残る行事になると思います。学友会はそれらの活動を支援するための組織ですので、学生生活の一端を実りのあるものにするためにも、大いに活用してもらえればと思います。

学生の部活動

運動部

硬式野球部	合気道部	陸上競技部
ソフトテニス部	水泳部	ゴルフ部
ラグビー部	硬式テニス部	競技スキー部
卓球部	バドミントン部	フットサルサークル
柔道部	サッカー部	
弓道部	バレーボール部	
剣道部	バスケットボール部	
準硬式野球部	極真空手道部	

文化部

軽音楽部
外国語研究会
栄養学研究部
茶道部
室内楽同好会
書道部
手話サークル



学遊抄

保健学科看護学専攻 森本忠興

学生時代について何か書くようにとの依頼があり、さて何を書こうかと考えたが、私には学生時代にこれといった印象深いものがない。クラブ活動はバドミントン部に所属していたが、余り活発に行っていたわけでもなく、印象に残るものがない。学生時代は比較的まじめに授業には出て、週2～3回の家庭教師に明け暮れた日々であったように思う。ただ、5年生の時に学友会執行部（総務）に所属し、山口大学で行なわれた西医体において宇部市に1週間程泊まり込み、裏方を行なったことを思い出します。昼は、当時の学友会会長の故四方一郎教授（法医学）と各会場を廻り、夜は四方教授と宇部市の飲み屋で過ごしたことを思い出します。確か西医体総合第2位になったと記憶している。

さて、私の生まれ故郷は、高知の四万十川上流に位置した大正町であり、小さい頃から四万十川で泳ぐ機会が多く、水泳は多少自信があった。そんなこともあり、20年前から趣味で水泳を始めた。最近泳ぐ回数が少なくなったが、今でも1,500～2,000m/回を泳いでいる。平成2年、先輩のすすめで日本水泳ドクター会議（事務局：東大武藤芳照教授）に入会した。現在、この日本水泳ドクター会議の副会長を務めている。この会議は、財団法人日本水泳連盟の中にある医・科学委員会/医事部の連携組織に位置づけられる医師の集まりで、昭和63年に発足したものである。現場での諸活動を通して、情報交換、人的交流を深めると共に、学術研究及び教育・啓発活動を行い、スポーツ医学・健康医学の普及・拡充と水泳・水中運動の健全な発展を目的としている。従って、オリンピック、世界水泳、日本水泳選手権、水泳マスター大会等へのチームドクターの派遣はこの会議から行なっている。また、日本アンチ・ドーピング機構はこの会議から始まったものである。内科・外科・整形外科・小児科・耳鼻科・眼科・皮膚科・脳神経外科・歯科等の多くの専門領域を持つ医師・歯科医師の組織で、特定のスポーツ関連の公認資格の有無を条件としていない。現在、全国に172名の会員を擁し、徳島大学出身の会員は私を含めて6名である。また、日本水泳ドクター会議では、「水と健康医学研究会」を開催し、水と健康に関わる医学的な効用・弊害など基礎・臨床的研究の発表の場と「水と健康医学研究会誌」の発刊も行なっている。さらに、現行大学での医学教育の中には、「スポーツ

医学」の系統だった講義・実習などが必ずしも十分に組み込まれていないために、スポーツ医学を志向したり、興味・関心を持つ医学生がスポーツ医学の考え方や対応の仕方を十分に知ることができず、また、卒業後の進路の進め方などについて悩んだりしている例が少なくない。そこで医学生（研修医を含む）を対象に、スポーツ医学の概念と内容、実践活動についての教育と共にこの学際的医学領域を育成し、運動・体育・スポーツを実践する人々への支援をより強く豊かにし、社会に貢献することを目的に、「医学生のためのスポーツ医学セミナー」も開催している。最近では、スポーツ医学の領域にとどまらず、身体活動と健康との観点を重視した「健康医学」の領域をも包括して本セミナーが企画されている。平成8年の岡山市での第1回セミナーを始めとして、現在まで長崎、京都、広島、岐阜、静岡、徳島、札幌でそれぞれ毎年開催され、その目的を達しつつある。

本稿では、原稿依頼の趣旨と少しずつ「医学生のためのスポーツ医学セミナー」について紹介した。古い時代は、「よく遊びよく学べ」というのが先輩からの一言であったと思うが、最近では色々な分野で活動の場を選ぶことが可能となっている。興味のある人は、これらセミナーに奮って参加され、大学・地域の枠を超えて、全国の医学生・研修医が交流し、学習しあえることを希望します。



2003年世界水泳バルセロナ大会・祝賀会（東京）にて北島康介選手と共に

医学部行事予定

- 7月24日(日) 西日本医科体育大会（8月12日(金)まで）
- 8月4日(木) 徳島大学オープンキャンパス（学部説明会）
午前：栄養学科，午後：保健学科
- ” 医学部保健学科看護学専攻体験入学 午前
- 8月5日(金) 徳島大学オープンキャンパス（学部説明会）
午前：医学科
- 10月3日(月) 後期授業開始
- 10月18日(火) 解剖体慰霊祭
- 11月2日(水) 徳島大学開学記念日
- 11月3日(木) 大学祭（6日(日)まで）



写真で見る 医学部



医科外来診療棟西側1階に
クリニカルスキルスラボが
移転しました。



保健学科学生のための研究室が完成



母性・小児看護の沐浴実習風景



編集 後記



歳本キャンパスでは、笛やお囃子の練習の音色が初夏の訪れを告げてくれます。学生に親しみを
持って読んで頂けるように今号の特集は「阿波踊りと医学部」を企画しました。子供の頃から慣れ
親んでいる人も初めて阿波踊りに接する人も、徳島の夏は阿波踊り抜きでは語ることはできませ
ん。いまや日本のみならず世界に誇るべきイベントの一つです。ほとんどの連で飛び入りの参加は
大歓迎ですので、初めての方でもどんどん参加して下さい。

もう一つの企画は、「国際交流」です。4月から村澤補佐が、国際関係担当として就任しました。
着任以来、医学部英文ホームページの作成、留学生交流会の企画、モンゴル健康科学大学との学術
交流協定調印等、精力的に仕事をこなされています。近藤教授、佐野教授に学生の国際交流に関す
る記事の執筆をお願いしました。大学レベル、部局レベル、分野・研究者レベル、大学院・留学生
学部学生レベルでの国際交流が活発になり、国際的に開かれ世界に発信する徳島大学医学部となる
ことを願っています。(福井義浩)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 福井義浩(委員長)、足立昭夫、武田憲昭、大下修造、太田房雄、吉永哲哉、森口博基、井上展啓

医学部だよりへのご意見・ご要望は、(第1総務係:木村)isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp までお願いします。
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel:088-633-9118 Fax:088-633-9028

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>